

機能分化社会における包摂 / 排除と社会福祉

淑徳大学 本多 敏明 (007470)

〔キーワード〕機能分化、包摂、排除

1. 研究目的

社会福祉や社会政策の分野において近年注目されている社会的排除 (social exclusion) の問題はなによりも現代社会の構造的帰結であり、現実には生じている排除問題と理念として掲げられたあらゆる人びとの包摂とのジレンマに現代社会は苦悩している。このような現代社会像を提示したのは 20 世紀を代表するドイツの社会学者ニクラス・ルーマン (Niklas Luhmann、1927-1998) であった。ルーマンは機能分化 (funktionaler Differenziation) という現代社会の構造的性質を描写し、包摂 / 排除 (Inklusion/Exklusion) の概念的な精緻化によって現代社会の最重要問題のひとつとして包摂 / 排除問題を捉えた。ドイツではこうしたルーマンの視点を理論的資源とした社会福祉研究が 1990 年代半ばから陸続と現れている。本報告はルーマンが提示した包摂 / 排除の概念と機能分化社会像が現代の日本の社会福祉 (学) にとってどのような可能性を提供するかを追求する。

2. 研究の視点および方法

社会福祉基礎構造改革ならびに社会福祉法制定などをはじめとする日本の社会福祉の大転換のなかで、これからの社会福祉の目標 「社会連帯」と「自立支援」に基づき「その人らしく」「住み慣れた地域で」の生活 はいかにして実現されるのか。関係する個人がコミュニケーションのメンバーとして認められ、配慮され、尊重されることがルーマンの包摂概念の主眼である。いいかえれば、そのつどの場面や状況において「その人」に対してどのように振る舞えばよいかといった当該の人物に対する期待 (Erwartung) が与えられていることが包摂であり、その反対の事態が排除である。このように人との関係を生きるプロセスに準拠して設えられているルーマンの包摂 / 排除の概念を理論的に検討し、これからの社会福祉 (学) にとっての有効性を探る。

3. 倫理的配慮

本研究は淑徳大学研究倫理規準を指針としている。

4. 研究結果

ルーマンによって提案された機能分化社会のありようは、多種多様な機能ごとに自律している諸機能システムが併存している社会である。経済、政治、教育、法、宗教、科学など複数の機能システムがそれぞれの分野の独自の論理にしたがって運航している。個々人

は、こうした多様な機能システムにそのつど関わることで生活上の諸要求を満たすことが可能になっている。このように多種多様な専門分野での部分的かつ一時的な包摂、つまり「マルチ包摂」が現代社会を生きる個々人にとってノーマルな事態となっている。このことを反対に言えば、多種多様な分野に関わらない状態（つまり排除）もまたノーマルな事態になっているとルーマンはみている。

ルーマンは、現代社会の包摂／排除の特徴を明らかにするために、社会構造が歴史的にどのように移り変わってきたかという包摂／排除のありようの歴史的な変遷を描き出している。そうすることによって、それぞれの社会の段階において、包摂／排除のありようを枠づけている社会構造、いいかえれば人びとがどのような人とどのような関係を取り結ぶ可能性（コミュニケーションの可能性）がその社会に準備されているかを分析の焦点とする必要があることを強調している。

機能分化以前の社会、つまり「環節分化社会」や「成層分化社会」では包摂がある部分システムへの「所属」を意味しそうした社会に個々人が厳格に統合されていた。それに対して、現代の「機能分化社会」においては、包摂は一時的・部分的になり、また排除はノーマルな事態へ変化している。

しかし、このノーマルな排除が、個々人にとっての継続的な排除を生み出す危機をそれぞれの機能システムは孕んでいる。なぜなら、それぞれの機能システムは、当の機能システムの合理性を高めることに役立つ人びと（たとえば「有能な」、「器用な」、「人間関係を円滑に進めることができる」人びと）を優先的に包摂し、それ以外の人びとを排除するからである。このように機能システムには人びとを不平等に扱い、排除を生み出し続けることがみずからの合理性を高めるという面がある。しかも、こうした排除問題を当の機能システムがみずからでは解決できない点に、機能分化した現代社会の危機がみいだされる。さらには、ある機能システムからの排除が継続的な排除、あるいはある分野（例えば教育）からの排除が他分野（職業）の排除に連動する「累積的排除」となる。

こうした機能システムからの排除の問題を当の機能システムに代わって対処しているのが社会福祉である。多くの機能システムがいわば「縦割り」で個々人を包摂するのに対して、「横断的に」個々人にかかわり、個々人が多様な機能システムに再包摂されることを課題とするものが社会福祉の特性といってよい。そうはいつても、社会福祉でさえもやはり個々人の一側面にしかかわることができないが、その他の機能システムがいわば機能システムの必要性から個々人を包摂するのに対して、個々人の必要性から個人の再包摂を探る点に現代社会における社会福祉の特殊性・重要性があると考えられる。